

2021年度 独創的研究助成費 実績報告書

2022年3月31日

報告者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	名越 恵美
研究課題	地域包括ケア病棟看護師長における高齢者がん患者に対する看護実践のマネジメント					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	名越恵美	保健福祉学部・准教授	がん看護学	研究計画, 実施, 総括	
	分担者	實金栄 荒井葉子	保健福祉学部・准教授 大学院保健福祉学 研究科・保健福祉科学 学専攻	老年看護学 老年看護学	分析, 成果発表 実施, 分析	
研究実績 の概要	<p>平成30年度の診療報酬改定では、「どこに住んでいても」「安定性・持続可能性のある」「質の高い緩和ケアを含むがん医療」といった方針が明示されたが、高齢がん患者は、住み慣れた地域で暮らしつつも不安定な療養生活を行っている状況にある(Nagoshi, 2016)。そして、穏やかに人生の最終段階を暮らす高齢がん患者・家族にとって、がん診療連携拠点病院から居住地域の病院へと通院する病院が変わってもがん看護の質は維持される必要がある。高齢がん患者ががんと共存しつつ住み慣れた地域で生活するためには、地域住民が通いやすい頼れる病院、質の高いがん看護が受けられる病院が居住地域の近くに存在する必要がある。</p> <p>しかし、質の高いがん看護の実施には、看護師個人の努力だけではなく、病院の在り方および病棟の在り方が影響する。したがって、看護師の「高齢がん患者・家族の悔いのない人生への支援」への意欲を維持するために、その就業環境・教育環境を管理者が整えることは喫緊の課題である。以上のことから、本研究では高齢がん患者へのがん医療及び看護サービスを提供するために、がん看護の療養支援に関する看護師長の管理の実態を明らかにすることを目的とする。直接看護師に支援・指導を行う病棟看護師長の実践を明らかにすることにより、高齢がん患者・家族が住み慣れた地域で療養生活を送るために行われる看護師の高齢がん患者・家族への支援状況・支援環境の改善への示唆を得ることができる。</p> <p>調査1：地域包括ケア病棟看護師長のマネジメントの構造化について</p> <p>研究方法：1) デザイン：質的帰納的研究デザイン 2) データ収集方法：研究の同意が得られた参加者に対して、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行う。インタビューは個室でインタビューガイドに沿って自由に語ってもらう。インタビュー内容は承諾を得てICレコーダーに録音する。 3) 調査内容：年齢・性別・学歴・看護職歴・師長経験年数・病床数・がん患者の数・インタビュー内容は、先行研究を参考に「看護師への指導・調整の実際」「がん看護の管理上困った経験とその乗り越え方」「自分へどのような支援が欲しいか」など。4) 分析方法：分析は、面接内容を逐語録にデータ化とし、Krippendorff の内容分析の手法(Krippendorff, K, 三上他訳, 1989)に基づき、個別分析・全体分析の2段階の手順で行う。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績の概要</p>	<p>結果：300床以下の地域包括ケア病棟看護師長14名に面接調査を実施した。地域包括ケア病棟師長5名、療養病床師長5名、一般病棟師長4名であった。現在は、分析中である。</p> <p>コロナ禍における病棟管理に関する役割認識が多く語られた。病棟の体制や物事を俯瞰して見ることを管理者としての基軸とした上で、人材育成を重視し、患者にとって顧客サービスとして有用な看護を目指していた。さらに、秩序への関心を持つことで、スタッフの倫理観の育成及び組織やシステムに対する倫理的課題を認識していた。</p> <p>一方で、臨床看護師から管理職へ役割移行するにあたり、職業的アイデンティティの揺らぎが見られた。そのため、師長として自己確信できる体験や支えてくれる同僚・上司の存在が必要であり、組織全体で師長を育成する土壌の重要性が示唆された。</p> <p>調査2：コロナウイルス感染拡大により、面接がスムーズに行かなかったため、大幅に遅れた。そのため、調査2は実施に至らなかった。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>・地域病院における病棟師長の倫理的課題の認識：日本看護倫理学会第15回年次大会2022年5月発表予定</p>

